



夢現万華鏡

高野敦志

目次

はじめに	1
愛の鋳型	3
あそこに猫が	5
天草四郎の母	7
天邪鬼の將軍	9
蟻とアリクイ	11
生き霊と交わる	13
異星人の対話	15
一切皆空	17
牛の曾長	19

19 17 15 13 11 9 7 5 3 1

宇宙との語らい

美しい鳥

美しいままで

浦島太郎外伝

売られていく少年

永遠の契り

大君の名前

お前が一番

顔の色

鏡を見なさい

かくの如く我聞けり

火星は第二の故国

『河童』異文

神のお告げ

鴨とり爺さんの顛末

行者と怨霊

吉良殿の最期

クマノミの婚活

くまモンの憂鬱

クラゲの唯我独尊

原発を造らせよう！

凍らない魂

極楽はいずこにありや

心の欲する所に従ひて

67 65 63 61 59 57 55 53 51 49 47 45

43 41 39 37 35 33 31 29 27 25 23 21

ゴッホへの決別状

言霊生成ソフト

古来の文化

怖い物なし

最後の男

魚の目

桜の話

時間よ止まれ

獅子身中の虫が歌う

死相

傷痕軍人とバイオリン

少年と蛇

身体髪膚

線香花火の憧れ

千の舌を持つ鬼神

双頭のサンマ

鷹の出家

ただの箱

旅に病んで

食べられる喜び

地球の男に飽きたところよ

チャーリー・パーカーの遺言

月夜に尺八

翼がほしい

116 114 112 110 108 106 104 102 100 98 96 94

92 90 88 85 83 81 79 77 75 73 71 69

電腦幽霊

とりかへばや物語

トンジユク（入魂）

偽ニュース

鶏の化身

人間ロケット

バーチャル・コンサート

迫真の演技

汝、姦淫するなかれ

女色即是空

バイオテクノロジーによる男性妊娠の効用に関する考察

八幡神の還俗

憑依

奉行と畳屋

ヘーゲルの最期

ホログラフィックな知性体

孫からのメール

マトリョーシカと呼ばれた男

夢遊病の夢

もう一つの地球

もう一人のお前

与那国島の人升田

理想の相手と出会えます

冷泉帝の懊悩

164 162 160 158 156 154 152 150 148 146 144 142

140 138 136 134 132 130 128 126 124 122 120 118

老子再誕

ロボットがあふれる

私は誰（我是誰）？

170 168 166

はじめに

一口に短編小説といっても、綿密に計算されたエドガー・アラン・ポーの短編から、志賀直哉や梶井基次郎の短編のように、随筆や散文詩とあまり変わらないものまである。また、長さの上で特に短いものを、星新一は「ショートショート」と呼んだ。

作家の川又千秋氏によれば、最も短い字数で書けるのは「三百字小説」だそうだ。それより短いと小咄風になってしまうとのこと。そこで、自分も「三百字小説」に挑戦してみようと思った。確かに三百字あれば、ある事件の一場面ややりとりは書ける。短く書こうとしても、どうしても字数を超えてしまうから、どの語が不可欠でないか、厳しい判定を求められること

になる。ぎりぎりに切り詰められ、凝縮ぎようしゆくされたエッセンスだけが残される。

実際に書いたもののうち、その時代に取材したものは、真つ先に内容が古びてしまう。改めて読み返して、今でも面白いかもしれないものだけを集めてみた。古典に取材したり、SF、寓話ぐうわなどが多くなつたが、実際に目にした光景を脚色したものもある。各編は互いに関連がないので、便宜的べんぎに五十音順に並べ、超短編集『夢現万華鏡』と名づけることにした。

二〇一六年十二月二十日

高野敦志

愛の铸型

八月二十四日は朝から山の鳴動めいどうが止まらなかつた。地響きのために、テーブルの食器が神経質に震えている。そのとき、ヴェスヴィオ山が火を噴いたという声が聞こえた。ルキウスが外に出ると、山から黒煙が上空高くまで上つていたが、突然腰が砕けるようにして、町に向かつて押し寄せてくるのが見えた。ルキウスはベッドから病やまいの妻を連れ出したが、降り積もる熱い灰に息ができません、道の上にくずおれてしまった。妻の体を抱きながら、ルキウスは妻に言った。

「僕は君を抱いて死ぬ。僕たちの愛は死をも乗り越えるだろう

……」
それから、千八百年の歳月が過ぎた。二人の肉体が朽ちた空
洞に石膏が流され、ルキウスと妻の最期は白日の下にさらされ
た。

あそこに猫が

そいつはいきなり現れた。ぼくはたまげてのけぞってしまっ
た。恐る恐る近づいたのだが、向こうはこちらを無視しやがっ
た。そこで、後ろからのぞこうとしたが、忍法にんぽうを使って消えて
しまった。どうやらやつは、厚みというものが無いらしい。

ドアが開いて、お店の中からお姉さんがお皿を持って現れた。
そいつがまたしやしやり出てきた。甘える声を出すと、肉の塊かたまり
をまんまと物にした。ぼくももらおうと思ったが、つれなくド
アを閉められてしまった。

かわいいメス猫が現れ、テーブルの上に座っている。ぼくは
食い意地張ってた自分が恥ずかしくなった。娘の鼻にキスした

けど、つんと澄ましたままだ。やっぱり女って難しいなと思っ
たら、真つ暗になった。

天草四郎の母

寛永十五年、島原半島の原城に立てこもっていたキリシタ
ンや浪人は、幕府軍の総攻撃で壊滅状態に陥った。戦闘の中
で天草四郎の母は捕らえられ、老中松平信綱の前に引き出さ
れた。

「主の教えを信じるのが、どうして罪なのでしょうか」
「キリシタンは異国の邪教であり、侵略する国の民を籠絡す
る手段でもあるからだ」

「尊い教えを信じることで、人の魂は救われます。四郎はたと
え磔にされたとしても、主の教えを守ること奇蹟を起こし、
死後の平安を人々に証すことでしよう」

「この女に息子のなれの果てを見せてやるがよい」
薄化粧した美少年の生首が、縛られた罪人の前にさらされた。
その途端、母親は「四郎、四郎」と泣き叫んで気を失った。

天邪鬼の將軍

今は昔、震旦しんたんに良きことを咎め、悪しきことを奨励しょうれいする將軍がいた。すでに皇帝をしのぐほどの権勢を誇り、宮廷料理にも飽き足らぬ美食家だったが、暴飲暴食による胃腸の持病を持つていた。何も知らぬ家臣は、ますます胃にもたれるご馳走を奉った。

腹下しを抑える薬を所望したが、耳の遠い医師は虫下しの薬を処方してしまった。すると、將軍のお腹から三戸さんしをはじめとする人面の虫が、次から次と出てきた。道士の診立てによれば、將軍の天邪鬼あまのじやくもこれら邪悪な虫が取り憑いていたせいだということだった。

病平癒へいゆと喜んでいたところ、生き残った虫が天帝てんていにそれまでの所業しよぎょうを告げたために、ほどなく皇帝から罷免ひめんの沙汰さたが下されたとなむ語り伝へたとや。

蟻とアリクイ

蟻ありの一族は巢に入り込む舌の怪物に恐れをなしていた。いくら口で嘔かみついても、ひとたび舌にとらえられると、怪物の胃袋に呑のみ込まれるからだだった。蟻の長老はそれがアリクイであることを知っていたが、若者たちは恐れをなして無抵抗になつていった。

それを苦々にくにくしく思った長老は、少数の勇者を呼び出して、夜明け前に食料をすべて地上に運び出すように説得した。朝になると巢の中は大騒さわぎになり、若者たちはまかれた餌えきを取り戻しに地上に集結した。

そこにアリクイが現れた。働き蟻を片っ端から食べ始めたが、

数万の蟻たちは一斉にアリクイに食いついた。暴れる怪物もついに横倒しとなり、蟻たちに解体されて、有り余るほどの食料となった。

生き霊と交わる

「女は夜ごと夢の中に出てきて、僕のことを誘いました。ついに床の中で交わり、可愛い男の子まで生まれました。家族楽しい生活が始まりましたが、朝になるとアパートの中は僕一人です。不思議なことに、夢の世界は続いていき、寝ている間だけが幸福な時間となったのです」

「それは心理学で補償って言うんだよ」

「現実の生活はすきんでいきました。ある日、白昼の街角で妻そっくりの女を見つけたんです。僕は巧みに路地に誘い込むと、有無を言わせず犯しました。僕は現実の世界でも家族がほしかったし、妻の方だって、夢の中に出てくるくらい、僕のこ

とが好きだったんですから。なのに、あんたなんか知らないと言われ、無性に腹が立った僕は……」

異星人の対話

「どうして地球人に警告を与えないのですか？」

「かつての住民のような謙虚さを失っているからだよ。我々がいくら警告しても、もはや神の言葉として従うことはなくなっている。ほら、あの地域を見てみる。住民同士に殺し合いをさせて、金儲けしてる奴らがいるじゃないか。地球が生きた星であり、その怒りが天体内部の起爆装置に点火させ、住民すべてを一掃しようとしていることも、すでに忘れてるんだろう。

滅亡するのも時間の問題だよ」

「でも、犠牲となる大半の住民には罪がありません。助けてやらないのですか？」

「天は自ら助くる者を助く。抵抗しないことは、すでに罪深いことなのだ。我々はもはや警告する意欲すら失ってしまった」

一切皆空

出羽国湯殿山の皆空上人は、穀断ちした上で土中入定のため石室に入った。竹筒を通して地上の空気を吸いつつ、衆生の救済を祈り続けた。息絶えたところで竹筒は引き抜かれた。三年後に掘り出され、即身仏として祀られるはずだった。ところが、廃仏毀釈の嵐の中で、上人の入定は忘れ去られた。肉体は死しても、上人の意識は石室の中にとどまり、仏として迎えられる日を待ち続けた。次第に虚無感に襲われ、気高い精神にも乱れが生じた。

やがて、地上から人間はおろか、あらゆる生物が滅び去り、救済する対象がなくなったのを感じた。

ついに、宇宙の最期が訪れた。ビッグリップにより、あらゆる存在はバラバラに引き裂かれ、上人の苦悩も空と化した。

牛の酋長

牛の酋長のところに、人間がやって来て「ミルクを分けて下さい。代わりに冬でも飢えないように干し草をあげます」と申し出た。酋長は受け容れたが、人間はミルクと一緒に子牛を盗むようになった。

牛たちが干し草を食べていると、人間がまたやって来た。

「食べてすぐ寝ると牛になりますよ」

体を動かすのは健康にいいという言葉を受けた酋長は、村の牛の多くを人間の農作業に就かせた。

「酋長に刃向かう者がいるようです。奴らを去勢してしまえば、地位は安泰ですよ」

會長は人間の提案を受け容れた。自身の血筋の者だけが種牛となり、残りの者は肉牛として食用に供されるようになったが、去勢されたオスたちには人間に刃向かう力はなかった。

宇宙との語り

土佐国室戸岬の洞窟で、若き空海は密教の修行をしていた。身はやせ細り、髪やひげも生えるに任せ、ひたすら真言を唱え続けていた。ついに仏果を得られる時が来た。明け方、空海の口に明星が飛び込んできた。それ以来、心の中で念じると、大日如来の声が聞こえるようになった。

「なぜ祈りが実現するのでしょうか」

「それは行者が我執を捨てているからだよ」

「この世のすべては空しい、ということを知るだけではありませぬね」

「実体がないからこそ、祈りによって世界を変えることができ

るんだよ」

「世界とはつまり……」

「私のことだよ。私の心の動きが世界なのだ」

次の瞬間、空海の身体に宇宙が流れ込み、夜空に輝く金色の
大日如来となった。

美しい鳥

ウグイスの夫婦が茶色い卵を五つ、交替で温めていた。その中にまだらの卵が混じっていた。やがてヒナが次々に生まれたが、不思議なことに、ヒナが一羽ずついなくなるのだった。

ついに、ヒナは一羽だけになってしまった。しかも、羽の色もまだらでウグイスの夫婦よりも大きくなっていった。たらふく食べたヒナは、思わず「カッコウ」と鳴いてしまった。それを聞いて、はたと気づいた夫は、ヒナを捕まえようとした。逃れようとして、まだらの鳥は「美しい鳥ウグイス」と、心にもないことを言った。

「いつから私たちをだましていたんだ」

「あんたら夫婦が知らない、大昔からだよ」と答えると、「私悪くない、カッコウいい鳥」と鳴いて飛び去った。

美しいままで

君が不治ふじの病やまいに冒おかされ、死を覚悟したときの言葉を、僕は今でも覚えてるよ。

「美しいままで死なせて」

そこで、僕は君の美しさが断末魔だんまつまの苦しみで歪ゆがむ前に、静かに息を引き取らせたのだ。これが殺人だつて？ いや、眠るよ
うに意識を失わせたわけだから、君も本望ほんもうだつたはずだよ。

あとは、君の美しい姿が時の流れによって穢けがされるのを、いかに防いでいくかっていうことだ。君の体を炎でなんか焼かせないし、ましてや防腐処理ぼんぷじを施ほどこすために、体からだにメスを入れさせたりはしない。

そんなことできるわけないな。神さまじゃないんだから、時間を止める方策ほうさくなんかあるはずない。いや、あるという声が聞こえた。

自分自身の時間を止めてしまえばいいんだよ……

浦島太郎外伝

「宇宙船で誘拐ゆうかいするとき、男の体は仮死状態にして運びました。我らの一日は、地球人の百年に相当しますから。実験して分かったことは、奴らの脳はわけの分からぬ状況に陥った場合、理解できるように歪ゆがめて解釈する癖があるということです。我らの宇宙船を亀かめという生物と取り違え、連行されるのを亀を助けた恩返しだと思い込んでいたようです。実験が済んだ生き物に、なぜ生体の時間を停止させる箱をお渡ししたんですか」
「ショック死させないためよ。若いまま帰還させてね、開けるなど言えば、開けるに決まってるじゃない？ 老化の過程を調査する実験が残っていたわけ」

「おかげで急激に老化していく過程は、すべてデータとして保存されました」

売られていく少年

西アフリカの海岸近くの村で、コロは母親や妹たちと暮らしていた。畑で麦を育てながら、羊とヤギを飼っていた。強烈な太陽と青い空、ナツメヤシの林で駆け回るのが好きだった。

ある日、村の役人が来てコロを引き立てていった。酋長が家を御殿ごてんのように建て替えたので、代金として村の少年十人が白人に売られたからだった。

コロたち少年は後ろ手に縛られ、数珠じゆずつなぎにされて海岸に並ばされていた。コロの母や妹も来ていて、体を大きく揺らして泣いていた。

少年たちは縛られたまま、甲板に寝かされていった。青い空

を眺めながらコロは思った。僕はアフリカの大地に生まれたことを悔やまない。でも、なぜふるさから引き離されるんだろう。

永遠の契り

平野屋の手代徳兵衛は、預かった金を悪友に騙し取られ、横領の濡れ衣まで着せられて、遊女お初のもとに逃げ込んだ。銀二貫目を盗ったとされれば、死罪は必定。生きる望みを失った徳兵衛は、哀れんでくれたお初とともに店を抜け出した。曾根崎の森で来世での契りを約すと、徳兵衛はお初と自分を刺して果てた。

来世で二人は畜生道に堕ちたが、犬と猫に生まれて契りを結べなかった。次の世では阿修羅道に生まれたが、敵国の民で出会うことはなかった。ようやく徳兵衛は、お初らしい女と出会ったが、すでに人妻となっていた。しかし、徳兵衛は諦めな

かった。無限に転生を繰り返していけば、あの日の二人に生まれ変われるものと信じた。

大君の名前

難波津の沖から、大君は対岸にそびえる石造りの墳墓をご覧になった。これだけ壮大なものは震旦といえどもあるだろうか。生前に完成した御陵に大層満足のご様子だった。

「なぜ陵にご自身の名を刻まれなかったのですか」と大臣が尋ねると、大君はそんなことも分からぬのかと苦笑いされた。

「震旦の文字で記せと申すか。それでは我が国がかの国に服したものと、後世の者に思われてしまうのではないか。朕のまことの名は誰にも伝えぬ。言葉というものは文字に記さず、口から発することで本当の力を持つ。文字は言葉の抜け殻のようなものではないか。そんなものではなく、この陵墓の壮大さによ

つて、民草は朕の偉大さを心で感じる事ができるのだよ」

お前が一番

お見合いで顔を合わせた途端、あの人は目をそらしたの。ほんとは派手で、頭の切れる女が好みだったのね。

「私のような女じゃ満足できないんじゃないかしら」

そう言っって席を立ったとき、あの人は態度を翻して迫ってきたわ。すぐに「お前が一番だ」って口説くのよ。何それ！ 殺し文句のつもりらしいけど、どれだけ遊んできたっていうのよ。きつと私が言いなりになると思ったのね。

感づいてたけど、親に言われるままに結婚してしまった。案の定、女中扱いだったわ。亭主閑白つてのが死語となった今じゃ、信じてもらえないだろうけどね。

でも、あの人、死ぬときに手を握って、「お前が一番だ」つて言ってたから、遺言ゆいごんだけは嘘じゃなかったみたいね。

顔の色

アメリカ人の留学生が、都内の居酒屋を出て、ビルの前でたむろしていた。そこにパトロール中の警官が現れ、端にいた南アジア系の学生の腕をつかんだ。彼は硬直した表情こばをしていたが、在留カードを提示しろという警官の要求を拒んだ。

中国系の女学生が気づき、警官に食ってかかった。

「どうして彼にだけ、在留カードの提示を求めたの？ 私たちはみんな外国人よ！」

警官はうろたえたものの、提示を拒む学生の腕をつかむと、無理やり引きずっていきこうとした。ようやくヨーロッパ系の学生も気づいた。

「見せてやれよ。こいつは自分がアメリカに来れば、後ろ指さされることを知らないんだよ」

差し出された在留カードを見て、警官の顔は真っ赤になった。

鏡を見なさい

チベットの村で若い女が亡くなった。その家では夜中になると、女の霊が叫び声を発し、遺族を震え上がらせていた。話を聞いたラマは、法力ほうりきによつてさまよう霊を見つけ出し、一切は空であると言いつて聞かせた。

「いくら死んだって言われても、魂は生きてるんだ。早く生き返らせておくれよ」

「お前は魂が肉体と同じ姿をしていると思つているな。それなら、今、自分がどんな姿だか見てみるがいい」

ラマは女の霊に向かつて鏡を差し出した。霊は鏡に写つた姿を見て動転どうてんし、一声叫びひとこえを上げると失神しっしんしてしまった。着てい

たはずの衣が剥ぎ取られ、素裸の女体が写っていたからである。失神によつて霊は無に帰し、それ以来、女の叫び声は聞かれなくなつた。

かくの如く我聞けり

須弥山の南、閻浮堤の東に小さな王国があつた。そこに住む男たちがある時、透かし模様の入つたひらひらした生地きじの服をまとい、数々の宝玉ほうぎよくを身につけ、白粉おしろいで顔を化粧するようになった。しかも、女人にょにんに対する興味を失い、香木こうぼくを焚たいては音楽を奏で、独居するようになった。

女たちはこのままでは国が滅んでしまうと、国王に訴えた。すると、仏法ぶつぽうに帰依きえしていた王は、女たちをなだめて云つた。これは吉祥きつしやうである。男たちは女人にょにんのように暮らすことで、世の争いから離れ、人生は夢のごとしと悟つて、男女の交わりを断つたのである。たとえ国は滅んでも、煩惱ぼんのうの火は消え、生き

ながらにして仏の境地に至ったのである。汝らもすべては
幻まぼろしと知るべしと。

火星は第二の故国

地球化に成功したという知らせが届くと、將軍は上機嫌で火星を植民地として併合することを宣言し、主要閣僚かくりょうとともに火星での記念式典に参加すべく、ロケットに乗り込み出発した。いざ火星に到着してみると、大気には十分な酸素が含まれておらず、強い紫外線のせいで宇宙服なしでの外出は無理であることが分かった。將軍の怒りに油を注そそいだのは、故国で革命が発生して政権が倒れ、民主化されてしまったという知らせだった。

「馬鹿者ばかものめが！ ただちに帰国するぞ」

「火星では地球に帰還する技術は、まだ確立していないという

ことです。我々ははめられたのです。臣民どもは我々が喜ぶことしか言上しなかつたので、まさかこんな事態に立ち至るとは……」

『河童』異文

河童の國で將軍が實權を握つたことがありました。將軍は河童の民衆を奴隸化し、他國の戰爭に參じて、私腹を肥やさうとさへしました。長老の諫めをも聞き入れず、專横の限りを盡くした末に、とどまることを知らぬ增長によつて、國王に取つて代はらうとしたのです。

つひに、國王の忠臣が一計を案じました。將軍を宮殿の露臺に招じ入れると、玉座から演説するやうに促しました。將軍が嬉々として演説を始めるや、出入口を封鎖してしまつたのです。將軍は扉を叩いて抗議しましたが、その憤怒も空しく、眞夏の御天道様に照らされて頭の皿も干上がり、しまひ

には干物のやうになりました。国立博物館に展示されてゐる河童の木乃伊がそれです。

神のお告げ

文禄五年閏七月、別府湾の瓜生島から一人の老翁が、小舟に一体の神像を載せて逃れてきた。岸に上がると、集まつてきた群衆に対して、瓜生島が間もなく沈むと告げた。

「日頃信心してる恵比寿様で、像が赤くなったら島が沈むつてお告げがあつたのじゃ。今朝お参りすると、何と恵比寿様が忿怒しておられたのじゃ」

「爺さんは担がれたんだよ」と、役人は哀れむように答えた。「いや、担ぐ者がいたとしても、恵比寿様が其奴の口を借りたのじゃろう。像を赤く塗るなんてことお許しになつたのも、救つてやろうという思召しに違いない」

その時、激しい揺れが一带を襲った。砂礫されきで出来た瓜生島は液状化し、松の木や人家じんかとともに波に吞まれていった。

鴨とり爺さんの顛末

隣人の犬を殺し、その墓から生えた木で作った臼うすも、腹癒はらいせで燃やしてしまった老夫婦がいた。その灰で鳥を捕まえようと
思った爺さんは、家の屋根によじ登った。ちょうど鴨かもの群れが
飛んできたので、鳥の目に向けて投げつけた。

下では婆ばあさんが棍棒こんぼうで待ち構えていた。爺さんの声がしたので、落ちてきた鴨を叩き殺した。早速さつそく、さばいて鴨鍋を作ったのだが、いつになっても爺さんは下りてこない。仕方なく一人で食べて寝ることにした。その夜、婆ばあさんの夢枕ゆめまくらに爺さんが現れた。

「鴨鍋はおいしかったかい？ 実はその鴨はわしだったんじや。」

我が身を喜捨きしゃして食べられたことで、わしは悪業あくごうを捨ててることができ、こうして極楽往生ごくらくおうじょうすることができたのじゃ」

行者と怨霊

弘安四年、難破なんぱした元軍げんぐんの生き残りのうち、蒙古兵もうこへいはことごとく斬首ざんしゅにされた。それ以来、刑場となった志賀島しかのしまでは、夜な怨霊おんりようたちの怒号どごうが響くようになった。そこで浜辺やしろうに社やしろを築き、行者は招魂しょうこんをさせることにした。怨霊の首領しゅりようが現れたので、行者は神として祀るので壺つぼの中にお入り下さるようにと勧めた。

手下の怨霊も神に祀られると聞き、自ら壺の中に入っていた。すべて入ったところで、行者は嚴重ふくいんに封印した。弟子でしが「壺の底は天界に続いているのか」と問うと、行者は呵呵かかと笑った。「閉じ込めて出られないようにしておくだけだよ。首領さえ招

き寄せれば、あとは怨霊といつても素朴な奴らだから、生前と同じようにすぐ騙されてしまう」

吉良殿の最期

江戸本所の吉良邸に、浅野内匠頭の遺臣、大石内蔵助ら四十七士が討ち入り、明け方によく隠れていた上野介を発見した。庭に引き出された老人は、恨めしげに内蔵助を見上げた。

「乱心した内匠頭に斬りつけられた上に、お前らに命を狙われてここ一年、生きた心地がしなかったぞ」

「これは定めとお考えくださいませ。元より我ら私怨によってお命を狙ったわけではござりませぬ。我らが主君はお仕置きを受け、吉良殿は理不尽な最期を遂げられる。これによってご政道は正され、お二方の名はしかと人々の記憶に刻みつけられ

まずぞ。御領地の三州さんしゅうでは、馬に乗って領民たちをねぎらわれたお姿が、後の世のちまで語り伝えられましょう。いざ、お覚悟を」

クマノミの婚活

妻に先立たれたクマノミの夫は、新しい伴侶はんりよを求めている。前の女房はふくよかだったから、今度は小柄で可愛い子がいいと思っていたが、声をかけた相手をよく見ると、みんな男の子だった。

「俺おんなうんって女運おんなうんが悪いな」

ある日、クマノミは体の大きなメスにストーカーされていることに気がついた。あまりにしつこいので、小柄な男の子の家にいかくまってもらうことにした。この子はなかなか優しい気性きしょうで、餌いそうちゆうを分けてくれたりするので、同性ながらも好感を持って居候いそうちゆうしてしまった。

ある夜、寢床に男の子が入ってきたのでびつくりした。

「私、そんな趣味ないのよ」と女言葉を口にした途端、何と卵を産んでしまった。それからは仲睦まじく暮らしましたとさ。

くまモンの憂鬱

くまモンが体操をお見せすると、皇后さまがお尋ねになった。「いったい何人でやってらっしゃるの？」

くまモンは口がきけないので、「ぼく一人です」と書いてお渡した。

熊本県の県庁に戻ると、「四川省にくまモン出現！」というニュースが流れていた。きっとパンダと見間違えたんだろうと思ったが、インターネットで調べると、同じ時間に東京と熊本でショーに出ていた。

「やっぱり、ぼくは一人じゃないんだ！」

その日からくまモンのほっぺたから赤みが失せた。しょんぼ

りしていると、一人の男の子に声をかけられた。

「くまモンは神さまと同じだよ、同じ時間に別の場所に出現したって不思議じゃないんだ！」

くまモンのほっぺたにまた赤みが差した。

クラゲの唯我独尊

「我らクラゲ族ほど、ブツダの悟りを理解している種族はあるまい。こうして海中の岩石に、ポリプとして生息するときは、おのれの存在がやがてエフィラとして、多くの個体に分裂するのを知っている。一匹ずつのクラゲには実体などなく、すべては根源の生命から由来しているのを。とはいえ、いったん個体として成長すれば、雌雄しゆうに分かれて生殖せいしよくを行い、ブツダの教えを後世に伝えているのだ。存在が必ずしも無とは言えず、実感を伴う夢であることを体現しているからこそ、我らは悟りを象徴する満月の光として、海中の月にたとえられるのである」

演説が終わったところで、近くにいたエビは天敵のクラゲが

多数に分裂する前に食べてしまった。

原発を造らせよう！

「なぜ原発を造らせたんですか」

「奴らが望んだからだよ。地上に太陽を生む技術は、輝かしい未来を約束してるように見えた。財界は資源問題の解決を期待してたし、市町村は補助金目当てに進んで誘致もした」

「でも、奴らは敵国だったんですよ」

「我が国の核兵器の原料を、作らせるためだったんだよ。奴らの中には、いざ核武装できるのでと、内心ほくそ笑みでる者もいた。案ずることはない。原発つてのは、原子爆弾を全土にしかけたようなものなんだ。変なこと企んだら、ミサイル撃ち込んでやるだけで、奴らを壊滅させられるからな。唯一の計

算違いは、原発が立て続けに爆発してしまい、我が国まで放射能で汚染されてしまったってことだよ」

凍らない魂

夜空に出現したUFOは、地球人のサンプルを採集していた。クラブで踊る若者たちは、物質を透過^{とうか}する光線を当てられ、躍動する動きを止められたまま、瞬時にUFOに移動させられた。ガラスケースに凍結保存し、生物研究の資料とするためだった。

「まるで生きているようだろう?」

「そりゃそうさ。解凍すれば生き返るんだから」

その日から宇宙人の研究者は、人間たちのお喋^{しゃべ}りに悩まされるようになった。どうやら魂までは凍結できなかつたと見え、サンプルの人間たちは動きを止めたまま、日増しに生気を失っていった。鮮度が保たれていないことを恐れ、あわてて解凍し

たところ、若者たちはマネキンのように、ガラスケースの底に倒れてしまった。

極楽はいずこにありや

昔、唐の都長安ちやうあんに、若くして一切経いっさいきやうを讀破どくはしたことを誇る僧がいた。修行を怠おこたることはなかつたが、悟りの手がかりを得ることは長らくなかつた。池州ちしゆうの南泉普願なんせんふがんの門下もんかに悟りを得た者が多いと聞き、入門を申し出ることにした。この僧、普願の弟子の多くは愚鈍ぐどんなために悟りを得たと誤解しているものと考えた。

早速、普願はこの僧に向かつて問うた。

「極楽はいずこにありや」

「衆生の心相しんさうの内うちにあり」

「さにあらず。何となれば、衆生は実体なきものゆえ」

「実体なき衆生はいずこにも存ぞんすることなし。ゆえに、実体なき我を師は導くこと能あたわらず」
いきなり普願は僧の胸倉むなぐらをつかんで頭を叩いた。
「ここにおるじやろうが！」
その瞬間、僧は頓悟とんごした。

心の欲する所に従ひて

弟子の子路しろうが衛えいの国に旅立つ前に、筮竹せいちくで卜占ぼくせんしようとして
いるのを見て、孔子こうしは唇くちびるに笑みをたたえながら尋ねた。
「凶きようと出れば、衛に行くのをやめるかね」

「いえ、私は行くと決めましたから、いかなる卦けが出ようと決心が揺らぐことはありません」

「では、止めることはやめよう」

孔子はうつむくと、気をつけて行くがよいと付け加えた。

「先生は神靈に問うことはなさらないのですか」

「易経えいききょうは読むためのもので、人生の戒めいましとするにはよい。わしは年を重ねるにつれて、世界が心の欲する所に従って動くよ

うになった。というより、わしが世界の欲する所に従って動くようになったので、ト占などせずに何が待ち構えているか分かるようになってきたんだよ」

ゴツホへの決別状

ヴァン・ゴツホは引き出しの中から、ポール・セザンヌより受け取った決別状けつべつじょうを取り出した。それを読み返すことは、共同で版画を制作した日本の芸術家にならって、アルルで画家たちとの生活を夢見たことを思い起こさせた。

「芸術家が互いに支え合うだって？ 俺はおまえの空想に付き合わされるのになんざりしただけだ。たとえそばに誰かいたとしても、結局絵を描くのは自分自身だろ。影響なんか受けたらいけない。何を描くかは自分で見つけるんだ！ 一人で死ぬ覚悟ができてはじめて、おまえは歴史に残る画家になれるんだ……」

ゴッホは読み終えると、灰皿でセザンヌの手紙を焼いた。燃え上がった炎が消えたとき、こめかみにピストルを当てた……

言霊生成ソフト

このソフトはスペインの神秘家ルルスの結合術けつごうじゆつと、古神道こしんどうの言霊ことだま、宝くじ抽選ちゆうせんの円盤からヒントを得て開発されました。神経を集中してボタンを押すことで、高速で回転する円盤から、SWIITの言葉が選択され、自動的に文が生成せいせいされます。『日本国語大辞典』に収録された六十万語が登録されています。『予言モード』では、文は和歌の形に変換されます。文学モードでは、形容詞や副詞のチェックを入れることで、単語同士の関連性から、相応する修飾語が付加されたり、リズムに合わせて文の倒置などもされます。

なお、意味不明の文しか生成されない場合でも、バグではあ

りません。それは使用されるお客様の知性がその程度だということですよ。

古来の文化

異国船打払令が出た頃、攘夷運動に心動かされた殿様がいた。日本古来の文化以外は排すべしとのお触れを出し、領内のすべての寺院に廃絶を申し渡した。漢字も唐の国から伝来したものであるとして御法度となった。

「殿は漢字がお読みになれないから、このような無理難題を仰せになるのだ」

家臣は陰口を叩いたが、仮名文字も漢字を元に作られたと言上する者が現れた。さすがにそれはあるまいと思われたが、「我が国には神代文字がある」と神官が言い出したため、見たことのない文字に上を下への大騒ぎとなった。しかも、朝鮮の文字

から作られたものだ」と知れると、一切の文字使用は禁じられてしまひ、年貢ねんぐの取り立てにも不自由することとなつた。

怖い物なし

藩はんの財政が火の車なのに、遊興ゆうきやうにうつつつを抜かし、異国への備えが必要だという兵学者へいがくしやに乗せられて、銃や大砲の買い付けまで命じた殿様がいた。家老かろうがいくら諫めても聞く耳を持たない。そこで、家臣らは藩主を座敷牢ざしきろうに閉じ込め、幼い子息に家督かどくを譲らせた。

「なぜ予よは城内を自由に歩けぬのじや」
「殿はすでにご隠居まがりこの身。政まつりごとに気を悩まされることも御座りますまい」

家老が食事だけは、今まで通りの贅沢ぜいたくをさせ、美女はくも侍らせていたので、何ら不自由を感じなかつた。やがて、それまでの

所業が幕府に知られ、切腹の沙汰が下つたときも「極楽には酒池肉林もある」という家老の言葉を鵜呑みにして、介錯の場に引き出されても笑みを浮かべていた。

最後の男

男性の遺伝情報を伝えるY染色体は崩壊が続き、地上には一人の男しか存在しなくなった。男は日替わりで周囲の女性から誘われ、ハーレムのような状態だった。それは蜂の巣の中で、女王蜂が卵を産み続けるように、〇〇を発射する人生だった。おびただしい子供が生まれたが、すべて女の子だった。女性とのセックスにも飽きたので、自分の細胞でクローンの男の子を作った。女性の性感に興味を抱いたからである。

クローンが青年に成長した頃には、本人のY染色体も崩壊し、肉体が急激に女性化した。ついに意を決して誘いをかけたが、分身の青年に拒絶された。

「きれいな女が山といるのに、どうしてこんな婆さん、相手にしなけりやならないんだよ」

魚の目

僕は魚さかなの目が苦手だ。ブリのあらについてる、ぎよろりとした水晶玉すいしやうだまもだが、小魚のたくさんの目はもつと苦手だ。僕はシラスが食卓に上ると、母に叱しかられながらも、一つ一つの目を抜き出さなければ、一匹一匹を食べられなかった。小皿の中がいっぱいになると、弟は目にいいからと、盛り上がった目玉だけを食べてしまった。

「そんなことしてると、いつかバチが当たりますよ」

母に言われた通り、運動靴を脱ぐと、かかどに魚うおの目ができていた。そいつの中心には、小魚の黒目がついていた。いまいましてほじくると、別の箇所かしょにまたできた。しまいには、体

中に小さな目玉が現れた。弟はほくろだと言うんだが、針でつ
ついて血だらけにしていた……

桜の話

ソメイヨシノは花吹雪を飛ばしながら、「散り際の美しさこそ日本の美だ」と自慢した。隣の丘に自生していた山桜は、「花は桜と呼ばれたのは、本当は僕のことだったんだよ」と言い返した。

「いや、今の日本人が愛しているのは、俺たちソメイヨシノさ」「君たちは新参者で、死を美化するのに利用されてきた。それに、君たちは挿し木で増やされたコピーじゃないか。君たちは人が世話しなければ育たないし、六十年もすれば枯れてしまう。僕らには一本一本に個性があるし、枯れるまでに何百年も時間があるんだ。この国の変遷だって見てきたんだよ。歴史が繰り返

返すってことも、知らないんだろう？ 人が滅んだ後も、僕たちは子孫に命を伝えていくんだよ」

時間よ止まれ

今は昔、かぐや姫を見そめられた帝みかどは、月の世界の者たちから守るため、竹取の翁おきなの屋敷を檢非違使けびいしに囲ませ、御所ごしよの電脳から実況をご覧になっていた。月から怪しげな光が降りてきて、兵士が矢を放とうとしたとき、御所のモニターがフリーズしてしまった。

天文博士てんもんはかせによれば、月の使者は時間を停止させる光線を発射し、その間にかぐや姫を連れ去ったとのこと。帝は未知の科学にいたく関心をお示しになった。

ほどなく、竹取の翁からかぐや姫が残したとされる不老不死ふろうふしの薬が献上された。帝は時間を停止させるとは、すなわち身も

心もフリーズさせるに過ぎないことにお気づきになり、駿河国
の火の山で薬を焼くように命じられたとなむ語り伝へたと
や。

獅子身中の虫が歌う

ライオンが身体検査を受けると、お腹の中に回虫かいちゅうが寄生し
ていることが分かった。虫下しむしくだの薬を飲むべきだと、医者に勧
められているのを聞いて、回虫は生死の分かれ目と知って歌い
出した。

ライオンのお腹に住むこと幾星霜いくせいそう
おこぼれもらうも助け合い

肥満めんえきを防ぎ

免疫めんえき強め

病気に強い体を作る

我らを仇と見なさんな

お腹の中も助け合い

我ら回虫住むことで

一病息災

不老長寿

ゆめゆめ疑うことなかれ

けれども、回虫の絶唱にライオンは聞く耳持たず、医者勧め
めるままに虫下しを飲んでしまった。それからというもの、動
物園で食っちゃ寝を繰り返したライオンは、ぶくぶく太るわ、痒
くて毛をかきむしるわ、おまけに喘息持ちになり、見るも無残

な姿となった。

死相

妻は迷信深かった。顔にできたシミを気にして占うらない師に見てもらい、死相が出ていると言われて、ひどくショックを受けたらしい。

「私、このまま死んでしまうのかしら。どうしたら死なずにすむの？」

「死相が消えたら助かるかもしれない」と占うらない師は答えたそうだ。それからマツサージをしたり、エステに通ったりした。何か原因があるなら、顔だけきれいにしても意味ないと、危うく言いそうになった。

「それより、医者みに診てもらおう方が先だろ」

別れはある日、突然訪れた。心臓しゅつかんの疾患で虫の息の妻は「私、助かるわよね」と言った。

「あゝ」

「良かった……」と言って事切れた。

妻の努力は全くの無駄ではなかった。死に顔はいつになく美しかったからだ。

傷痕軍人とバイオリン

今から半世紀近く前、幼かった僕は父に連れられて夜の町を歩いていった。駅裏に差しかかったとき、悲しげなメロデーが聞こえてきた。松葉杖まつばづえをした初老の男が、昔の軍服姿でバイオリンを弾ひいていたのだ。戦争が終わって二十五年も経っているのに、何でそんな芝居しげしてみたことをしているのかと問うと、予科練の隊員だった父は言った。

「国のためと駆り出されて、こんな目に遭あわされたのを抗議しているんだよ」

そして先日、解雇かいことともに住みかを追われた若者が、ガード下の段ボールの中で寝転がっていた。僕はそら寒い気がして震

えた。この国はかつて若者を戦場に送り、今また使い捨てにしようとしている。同じことが繰り返されつつあるのだと。

少年と蛇

蛇は体温で獲物かどうか判断するんですよ。それに微かな視力と物の振動。舌をぺろぺろ出して、調べているんです。ハツカネズミのしっぽを持って、ガラスケースの上から近づけると、シュツと喉のどに噛みつくんです。その時ネズミは、チュツ、とだけ叫びます。それからとぐろを巻いて、ネズミを窒息ちっそくさせてしまいます。蛇は顎あごが外れるんですね。食道をネズミが滑すべって行くのも、外から見ると分かるんです。

ネズミを買ってから、二週間ぐらい、飼っていたことがありませんでした。そしたら、ネズミも可愛くなっちゃってしまった。固い米粒をやると、それを両方の前足で押さえて、齧かじっているんです：

∴。それを見ながら思いました、おまえの命も、今日限りだぞ、って。

身体髪膚

中国の上^{シヤンハイ}海に美しい妻を持つダンディーの男がいた。一人娘を授かったが、どうひいき目に見ても可愛くなかった。そこで、興信所^{こうしんじょ}を使って調査したが、妻が浮気をしたという証拠は出てこなかった。

ある日、妻の幼い頃のアルバムを発見した。今の美しい姿とは似ても似つかない顔つきで、一人娘にそっくりだった。

「身体髪膚^{しんたいはつぷ}これを父母に受く。あえて毀傷^{きしょう}せざるは孝^{こう}の始めなり」

「何、それ？」

夫は貞節^{ていせつ}を疑ったことをわびつつ、整形していたことを黙っ

ていた妻をなじった。

「だから女は化け物なんて言うんだよ」

「もう我慢がならないわ。あんたのあそこだって、親指小僧じやないの。帽子かぶせてごまかしてるの、私に気がつかないとでも思ってる？」

線香花火の憧れ

線香花火は打揚花火をうらやんでいた。大きさも桁違^{けた}いだし、夜空に大きく上がって、多くの観客を喜ばせるからだだった。

「私もあなたみたいに、晴れの舞台で輝きたいわ」

「でも、うまく花咲けるとは限らないし、あつという間に散って消えてしまうのよ」

花火大会の当日になった。暗くなって数発が打ち上がったが、友達だった花火が打ち上げられる前に、雷雨となって大会は中止になった。花咲く機会も与えられず、残りの花火はしけって廃棄された。

その夜、落ち込んでいた子供を喜ばすために、まだ雨のやま

ない軒下^{のぎした}で、線香花火は火を点^とされた。小さな蕾^{つぼみ}が牡丹^{ぼたん}の花を咲かせ、松葉^{まつば}のように四方に火花を放ち、余生を楽しむように菊の花びらを散らした。

千の舌を持つ鬼神

千の舌を持つ鬼神きじんがいた。生前に多くの民衆を騙したため、死後に地獄に墮ちたが、舌を抜かれるたびに、口の中から新しい舌が生えてきて、閻魔えんまをあきれさせるほどだった。地獄からは出られなかったが、人間界に分身を派遣して民衆を惑わし続けた。

この鬼神の罪状に心を痛めた仏陀ぶつだは、鬼神を諭して仏法ぶつぽうに帰依させようとしたが、鬼神は仏陀を騙すつもりでひれ伏した。「おまえの呪力じゆりよくは大したものだ。そこで悟りを得た者として、如来の位くらいを授けることにしよう」

鬼神が目の前の仏殿ぶつでんに入ったところで、仏陀は神通力じんつうりきを使っ

て鬼神を幻もろとも消し去ってしまった。

「おまえは六道輪廻ろくどうりんねから解放された。再生することもない。完全に無に帰したのだから」

双頭のサンマ

顔が二つあるサンマが休んでいると、♂^{オス}のサンマが泳いできた。

「君たちは一心同体で幸せだね。しかも、口が二つあるんだから、餌が二倍食べられるし」と、天然記念物でも見るように眺め回した。最近、海の中で異変が起きて、見たこともない新種が誕生しているという噂^{うわさ}は、耳にしていたけれど……

「いや、僕と妹は体が一つでも心はバラバラだから一身胴体だよ」

「でも効率的に餌が食べられるんだから、進化したわけだよな」
兄に答えさせまいと、妹の方が顔を向けたので、サンマの胴

体はY字型になった。

「いいえ、私と兄は食べ物の好みが違うから、綱引きみたいに
なって、いつも餌^{えさ}を逃^にがしてしまふのよ」

「それに雌雄^{しゆう}同体だから、夜の○○○○もないしね」

鷹の出家

若いオスの鷹はわけの分からぬ罪悪感に苛まれていた。独り身のまま過ごそうと考えていたが、成り行きでメスと結ばれてしまった。

メスは卵を二つ産んだ。一つが先にかえり、数日遅れてもう一羽がかえった。しかし、メスは兄の方にしか餌をやるうとしない。一羽だけ大きくなった雛は、弟を嘴でつつき、羽をむしってしまう。しまいには巣から突き落とそうと、背中を押している。

その光景を目にしたオスは、幼い日に自身が犯した罪の正体を思い知った。オスは太った兄の方をつまみ上げて巣から落と

した。残った雛も病弱なために死んでしまった。メスに見限られたオスは、剃髪して仏道に入ったが、そんな彼を周りの鷹はハゲタカと呼んでバカにした。

ただの箱

人魚にんぎょの国に多くの小箱が投げ込まれた。海底に沈んだ箱を拾ひろったのは、人魚の娘たちだった。箱を開けると、ガラス越しに真珠が見えた。手に取ろうとするとつかめない。ある箱では、若い男の顔が微笑んでいた。どうやら娘たちの望むものが映るらしかった。

ところが、小箱を拾った娘たちは、次々に失踪しっそうしていった。彼女を奪われた男の人魚は、小箱が怪しいと疑った。珊瑚さんごの上で見つけた箱を開けると、満天の星空が輝いていた。

謎が解けたと思ひ、日が暮れて海上に上がったところ、漁師に捕まってしまった。人魚の娘たちは見世物小屋たまたに叩き売られ

ていたのだ。男の人魚は船の上で激しく抵抗したために、ミイラにして博物館に展示されることになった。

旅に病んで

元禄七年、松尾芭蕉は大坂の旅籠、花屋仁左衛門宅で腹痛に悩まされていた。青ざめて寒気を感じ、食も喉を通らなくなった。やがて意識不明に陥ったが、門人たちの祈りが通じたのか、襖の向こうから呼ぶ声がした。宝井其角が枕元に近づくと、芭蕉は目で筆を執るように合図した。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

これが師の最後の句になるのでは、という思いから、其角は句が体言で止められていないことに疑問を感じた。弟子の上目

遣いに芭蕉はすぐに気づいた。

「枯野を廻るゆめ心にしようとも思ったが、死に際に風雅を装って何になろう。行く当ての知らぬ死への旅立ちを、ありのままに写すことこそ、旅に死んだ先人の最期も伝えることになるんだよ」

食べられる喜び

有は森の中で奇妙なオブジェを見つけた。枝によじ登って壺のような物体の入口から覗くと、底の方から甘く懐かしい匂いがした。縁の内側には柔らかな毛が下に向かつて生えている。頬を当ててみると、かすかな温かみとともにすすべする感覚が快かった。

気が遠くなる香りは危険な快樂に似ていた。縁に腰を乗せると、滑り台のように滑っていった。底は甘美な液体で満たされていた。もう自分が後戻りできないのを知ったが、後悔する気は起こらなかった。

有の手足の指先が溶け始めた。目も溶けていき、何も見えな

くなくなった。美しい女の栄養になるなら、自分の死も惜しくない気がした。やがて有の体は、肉襖の花びらを持つ紅蓮の火に似た花となった。

地球の男に飽きたところよ

歌謡曲を口ずさみながら、夜の繁華街を歩いていると、マナは自分の理想と寸分も違わぬ容姿の青年に声をかけられ、誘われるままホテルに行ってしまった。

熱い夜が過ぎていった。明け方、マナは恐怖で身をおののかせた。体にべったりとついた物質が、体内にも侵入した形跡が認められたからだだった。地球に侵入した邪悪な存在の罠に、まんまと引っかけられてしまったのである。

粘菌に似た生命体は、相手の欲望を反映した姿に変身すると、体内に侵入して菌糸を伸ばし始める。数ヶ月後、マナの皮膚を突き破って茸が生え出した。生命力をことごとく吸い取られ

た彼女が、命をつなぐための唯一の方法、それは生えてきた茸を自分で食べるということだった。

チャーリー・パーカーの遺言

一九五五年三月、死ぬ一週間ほど前、チャーリー・パーカーは、四つ年下のサックス奏者ソニー・ステイットを呼び出した。「おまえは俺がいなくなったら、楽になるんじゃないか？ 真似してるって言われたくないからって、わざわざサックスをテナーに変えるなんてこと、もうしなくて済むもんな。俺はバードだから、勝手にさえずってるだけだ。メロディーなんて考えちゃいない。神さまが世界創つくってるのとおんなじさ。気持ち良けりゃいいんだ。詩みたいなもんで、意味なんかどうでもいい。ところが、おまえの本領は歌うってことだろ。好きなこと、歌い上げりゃいいんだよ。俺の真似したくないって意識してる限

り、おまえは自分のサックス吹けないぞ」

月夜に尺八

うねるような響きが、虫鳴く秋空を伝ってきた。

「あれは尺八の音ですね。どこから聞こえるんだらう？」

「ここには明治の初めまで、鈴法寺りんぽうじという普化宗ふけしゅうの寺があつたんですよ。月夜になると響いてくるのは、『あえて涅槃ねはんに赴おもむかず』に、亡くなった後も尺八を吹いてるからでしょう」

「虚無僧こむそろうって武士しかなれなかったんですね。だから、サムライがいなくなつて廃絶してしまつた。民衆を救済することにも、関心が薄かつたんじゃないですか？」

「尺八の音に命を感じて旅する孤高の奏者、その調べに悟りを求める求道者ぐどうしや。自己の解放を願つてさすらい、たまたま耳を傾

けた者が、尺八の音に光を感じたなら、本人の救いにもなつたんでしょうね」

翼がほしい

若くして妻を亡くした男がいた。現実が受け容れられず、亡き妻との再会を願っていた。世界は一つの可能性に過ぎず、平行的な宇宙には死ななかつた妻が存在すると信じた。魔法を研究するうちに、妻を呼び戻すための儀式があるのを知った。

男が鏡の前で夢幻境に至ると、目の前に亡き妻が現れた。精神を凝らすうちに、物質化して言葉も喋るようになった。妻の幻影は物を食べ、夜の営みをすることも可能だった。やがて天使のように、肩には翼も生えてきた。

「あなたはもう現実から自由なのよ。心から願えば、翼が手に入るの」

出窓を開くと、夕闇に沈みつつある街が下界に広がっていた。

「さあ、行きましょう！」

妻を追うように、男は宙に身を任せた。

電腦幽霊

若くして死んだ妻は、脳から取り出された情報により、コンピュータの中に再現されていた。最初は喜んでいた妻だが、やがて男に不満を洩らすようになった。

「私は一日中こんな狭い部屋に閉じ込められているのよ。あなたの話すことと違ったら、昔を懐かしむことばかり。いつそ死んでしまいたい……」

「いくら死のうとしても、僕が電源を入れてしまえば、君は生き返ってしまふんだよ」

「分かったわ」

女は悲しげに微笑むと、鏡を取り出して男の姿を映し出した。

そこにはやつれて青白く、気味の悪い笑みを浮かべた自分が映っていた。男は激しい憤りを覚えて、ハンマーをモニターに打ちつけた。電源が切れる直前、女は「今度こそ死ねるわ」と喜んだ。

とりかへばや物語

早朝のバス停で、薄化粧したサラリーマンが、短髪の女子高生に話しかけた。

「あら、やだ。あなたセーラー服なんか着て、女装趣味でもあるの？」

「俺は本当は自分が男だと思ってるんだ。それなのに、ブラウスにスカートまではかされて、これじゃ女装させられてる気分だよ。せめて下着だけは、男物身に着けているだけどね」

「本当は女なのね！うらやましいわ」

女子高生はいけ好かないオヤジだと思ったのか、あざ笑うような口調くちようで言い返した。

「あんたはタカラジェンヌのつもりかい？」

「私は男に生まれてしまったから、会社ではスーツ着てるけど、中身は女の子なの。時々自分が男装してる女なのか、女装してる男なのか分からなくなるのよ」

トンジユク（入魂）

途絶えたときとされる秘法ひほうを求めて、私はカイラス山の麓ふもとにある堂を訪ねた。日焼けした初老の行者に話しかけたとき、死んだばかりの女が運び込まれた。行者が祈禱きとうを始めると、私の魂が引き寄せられて、民族衣装を着ている自分を発見した。

運び込んだ夫は私を妻だと思つて抱き寄せた。私は夫を押し返して、行者に早く女の体から出すように頼んだ。

「これは単なる催眠術ですよ。ほら、女はここに倒れてるじゃないですか」

「そんな口きいていいのか。私に助けを求めてきたはずだろ？」
堂の外に出ると、何と私が地べたに倒れていた。行者が陀羅尼だらに

を唱えると、私は元の体に戻ることができた。そこには行者も堂もなく、目をあざむく青い湖が広がっていた。

偽ニュース

夜七時の偽にせニュースです。今年のゆるキャラ・グランプリに、
〇〇市のベリー・ダンス君が選ばれました。ベリー・ダンスと言
いますと、女性が薄い衣装をまとい、腰をひねって踊る姿を
思い浮かべますが、こちらは男性が黒いかぶり物で顔を隠し、
お腹なかに描かれた顔をおかしく歪めて笑いを誘う「へそ踊り」を
モデルにしたゆるキャラです。演じる男性は体毛を剃そった上に、
寒空でも凶腹ずぼらでスマイルしなければなりません。腹芸の一種な
ので、嘘はつけませんし、へそに描かれた口では天ぷらや寿司
も食べられません。人前でお腹をさらす上に、手弁当という条
件なので、ベリー・ダンス君を演じてくれる若者を確保するの

が悩みの種ということです。

鶏の化身

スリランカの村では、初夜のベッドからシーツをはがし、新婦が処女であったか調べる因習が残っていた。若い男性はこたわらなくなっていたが、持参金の多寡でいさかきも生じた。

実は、新郎しんろうと新婦は結婚する前に愛し合っていたため、初夜の翌日の検査でもめ事が起こるのを恐れていた。そこで、妻の入れ知恵で、あらかじめ鶏の血液を採集しておき、結婚式の翌朝、両親の起きてくる前にシーツに赤い染みをつけておいた。

何事もなかったように、数日が過ぎていった。ところが、仕事から帰ってくると、父親は青白い顔をして、息子を庭の方に呼び出した。

「おまえの嫁は、鶏の化身けしんだぞ。血液検査に出したら人間のものではないという結果が出たんだ」

人間ロケット

世界初の有人ロケットが、まさに発射されようとしていた。内部は乗員一人のスペースしかなく、宇宙を舞台にした軍拡の先鞭せんべんをつけるべく志願した軍人が搭乗とうじょうしていた。結婚したばかりの妻は泣いて止めたが、必ず帰還するからと言いかせた。轟音ごうおんとともにロケットは青空を突き抜け、大気存在しない宇宙空間に到達した。星々とともに暗闇の中に輝く太陽を認めた。地球を周回する軌道に入りかけたとき、異常を知らせるサイレンが鳴り出した。妻の暮らす町は、すでに夜の闇に沈んでいた。

胸騒むなさわぎがした妻は、寢床から飛び出すと、ガウンを羽織はつて

屋外おくがいに出た。流れ星に見えた光は、火球かきゅうとなって燃え上がった。夫は闇を照らして帰還したのだと思った。

バーチャル・コンサート

生前に録画されたコンサートをもとに、ミュージシャンの演奏をバーチャルで再現する試みがなされた。当時の白黒映像をカラー化し、コンピューターで立体映像に変換した上で、音声もサラウンド化し、実際のスタジオの上にホログラムで映写したのである。

限界に達するまで突き詰めて、せんかい旋回しながら高みを目指すジョン・コルトレーンのサククスに、エリック・ドルフィーの超絶したフルートの音空間がコントラストを成なしていた。まるで死んだコルトレーンがよみがえり、意志を持ってサククスを吹いている気がした。

演奏が終わった瞬間、バーチャルと現実の拍手が一つになった。僕は我を忘れて舞台に駆け上がり、コルトレーンの手を握ろうとしたが……

迫真の演技

詩人のマラルメは、喉の奥が痙攣し、危うく窒息しそうになった。発作が治まったので、万一に備えて遺書をしたため、翌日医師に往診してもらった。命拾いしたことを話すうちに、マラルメは有頂天になっていた。

「こんな具合ですよ。舌がもつれて喉の奥に詰まって……」

前日の午後の出来事を再現しようとした。次の瞬間、舌が痺れて動かないのに気づいた。台詞と演技が真に迫って、断末魔の苦しみが再来したのである。遠ざかる意識の中で、「花」と呟くと、幻の花が浮かび上がった。詩の言葉は想像力にしか働きかけなかったため、演技を伴った言葉が生死を左右するなど、

思いも寄らなかつたのだ。花はいたわるように微笑むと、死の香りを奏でた。

汝、姦淫するなかれ

夫が不在の間に、大学生が勝手に部屋に上がりこんできた。しまいには、にじり寄って口説き始めた。

「キリストはパリサイ人に反対して、淫^{みだ}らな目で女を見ること自体、姦淫^{かんいん}するのと同じだと述べてますが、キリストは自己の思いがすべて実現してしまうのを知っていて、ことさら魂の清純さを弟子たちに強^しいたんだと思うんです」

そう言って、学生は人妻の手を握ろうとした。女はとつさに手を引っ込め、男の視線を避けながら言った。

「でも、あなたのような凡人にそんな能力あるのかしら？」

「これは誰もが気づかずに持っている隠れた能力です。奥さん

だって僕の思いのままですよ」

女は急に学生を睨みつけた。

「穢^{けが}らわしい男め、さっさと消え失^うせろ！」

女色即是空

仏弟子である舍利弗は、修行の妨げになるからと言って、道行く女人からも目をそらしていた。これを見た維摩居士は、避けようとこだわること自体迷いであると説いた。舍利弗が頑ななのを見て、維摩は天女に幻術を使うように頼み、舍利弗の体を女体に変えてしまった。

舍利弗は道行くたびに男から声をかけられ戸惑ったが、水面に映っている姿が天女であるのに度肝を抜かれた。

やがて、美しい衣を着けて化粧した自分が好きになった。流し目を使って男を誘おうとした途端、幻術が解けて坊主頭と袈裟の姿に戻ってしまった。相手が悲鳴を上げて逃げ出し、赤面

している舍利弗のもとに、維摩は現れると諭した。

「汝、女色も空なりと悟ったか」

バイオテクノロジーによる男性妊娠の効用に関する考察

本日は男性を妊娠にんしんさせる効用について、お話しようと思えます。従来じゅうらい、人間という種においては、女性が妊娠の役目を担になつてきました。美しい母親を持つ男性は、伴侶とすべき女性の容姿ようしに対する要求の基準が高く、かえって子孫を残す機会に恵まれない傾向にあり、ゆえに美形の遺伝子は絶滅の危機ひんに瀕ひんしてきたのであります。

遺伝子操作そうさにより男性が妊娠可能となった現在、美しい女性
は妊娠の負担を強いられることなく、卵子を複数の男性に産み
つけることができるようになりました。

これによって俄然がぜん、美形の遺伝子が栄え、日本人の容貌いちじろは 著

しく改善されてきたのであります。一方で、美女の誘惑により
未婚の父親が増えるという社会問題も生じました。

八幡神の還俗

応神天皇は生前『論語』『千字文』などの漢籍を愛され、国内の平定と土木治水に御心を悩ませ給うた。幽界にお隠れになつて後、仏道修行に勤しまれ、八幡大菩薩の名で崇め奉られた。

豊前の宇佐、京の石清水と祀られて後、源頼朝が鶴岡八幡宮寺を建立してからは、一年の多くを鎌倉でお過ごしになり、弓馬の神としても崇められるようになった。

ところが、元号が明治と改められるや、神官にそそのかされた暴徒が八幡宮寺を襲撃し、大塔や護摩堂、仁王門などを破壊し尽くした。長年の修行の道場を壊され、還俗を強いられたこ

とにいたく心を痛められた。

「この国は利他の精神を失い、異国を餌食とすることで、やがては亡国の危機に立たされるであらう」

憑依

体の不調が続いた私は、毎晩夢を見るようになりました。遠い昔の物語で、村は火をかけられました。敵兵は矢を放ち、仲間には次々に殺されていくのです。

「たぶん、私は取り憑かれてしまったんです」

上人は護摩を焚いて祈禱を始めました。その途端、肉体の中で壮絶な戦いが始まりました。私は自分が助けてもらおうとしているのか、追い立てられようとしているのか分からなくなりました、敵に対する怒りを掻き立てられ、私は大声で怒鳴っているのです。暗闇に閃光が走り、雷鳴が轟きました。

「おまえは助けられたいのか、取り殺されたいのか、どちらじ

や！」

上人の一喝に私も渾身の祈りを捧げた瞬間、怒りの塊はようやく体から抜けていきました。

奉行と畳屋

打ちこわしに加わって御用となった畳屋は、首謀者に仕立て上げられて死罪となった。閻魔庁にたどり着く頃、背後に自分を死罪にした奉行が立っていた。急死した奉行は、自分の方が先に裁きを受けると言い張った。

「拙者は間違つて地獄に堕ちた者でござる」

奉行は生前、天下万民のためと言いながら、罪のない者を拷問で死なせてきた。閻魔大王は激怒して、奉行の舌を鬼に切らせた。ところが、申し開きするたびに新しい舌が生えてきて、舌を切られる苦痛に苛まれ続けた。

畳屋は引き出された時、地藏菩薩に救いを求めた。

「おまえはもはや存在しない。存在しない者に苦しみはない」言葉を理解した途端、まばゆい光で畳屋は地獄もろとも消滅した。

ヘーゲルの最期

一八三一年、ベルリンでヘーゲルはコレラに感染し、臨終りんじゆうの時を迎えようとしていた。医師が問いかけても反応はなかったが、哲学者の意識は脳に閉じ込められながらも、「人間は自発的に死ななければ自由ではあり得ない」という命題について問い続けていた。

私は疫病えきびように罹患りかんして死ぬわけにはいかない。それは動物的な死である。むしろ、臨終においても自ら命を絶たつことで、死に勝利し自己を完成するのだ……。

すでにヘーゲルの心臓は停止していたが、思索は途切れず続いていた。看取った医師は死に顔を見つめ、看護婦にこう洩もら

した。

「しばらくは意識が残っていても、問いの答えを得ることはないだろう。謎を問い続けてこそ哲学者と言えるからだ」

ホログラフィックな知性体

ホログラフィー技術の進化にともない、仮想現実の立体像に人工知能を埋め込むことに成功したらしい。私が取材に出向くと、ホログラムで作られた知性体が、レストランのテーブルの前に座っていた。立体像はよほど精巧に作られているのか、エスプリの効いた話で会場を沸かしたばかりか、かなりのグルメで大酒飲みだった。

しかし、いくら精巧にできているとはいえ、立体像が飲み食いするだろうか。食べた物が床に散乱しているわけでもない。果たして、私はいつぱい担かつがれていたのか？

実は、目の前にいたのは、単なる大食漢たいしょくかんに過ぎなかったそ

うだ。ホログラフィックな知性体というのは私のことで、その日取材されていたのは、私の方だったのだ。

孫からのメール

僕は最近、孫と称する青年からメールを受け取った。

「人生にはほとほと愛想が尽きました。つきましては、自殺する前におじいさまのお命頂戴仕りたく云々」とある。

若者は奇想を貴ぶ余り、大胆不敵な行動に走るものだ。自身の存在を消すために、生まれる前に亡くなっていた祖父である僕を、未来から殺しに来るというのである。

何で半世紀後に生まれる孫に、命を狙われなければならない？ とはいっても、弟ぐらいの年のようだから、会ったら案外、話が合うかもしれない。

とは思ったのだが、歩むはずの残りの人生を、むざむざ失う

のも忍びない。そこで、精管を切除する手術を受けてしまった。それ以来、孫だという青年からメールは届かなくなった。

マトリョーシカと呼ばれた男

演説中の与党議員が群衆に取り囲まれ、もみくちゃにされた。その際、男性のぬいぐるみのはがされて、中から首相しゅしやうそつくりの人間が出てきた。ゆるキャラがぬいぐるみを着ているのは、小学生でも知っているが、スーツ姿の政治家のぬいぐるみがある。中から首相の分身が出てきたことに、現場を目撃した群衆は啞然あぜんとした。なるほど、自分の意見がないのは、中に別な人間が入っていたからだった。

「こいつはマトリョーシカだ！」

活動家の一人が腕をつかむと、首相のぬいぐるみも破れて、さらに中からA国の大統領が出てきた。首相が国民の幸福をな

いがしろにして、他国の便宜べんぎばかり図っていたのも、中に大統領の分身が入っていたからだった。

夢遊病の夢

ある夜、僕は改築前の部屋で寝ていることに気づいた。これは夢に違いないのだが、机や本棚、障子の配置しょうじまで当時のままなのに驚いた。調子に乗って廊下に出てみることにした。ただ、実際には二階のベッドで寝ているはずなので、目に見える廊下と、現実には存在する廊下の位置を考慮して、階段から転げ落ちずに歩くのには勇気が要いった。

ダイニングキッチンに入ると、正面にかつてのトイレが見えた。ドアを開けると便器が下にある。ただし、これは現実のトイレではないはずだ。興味本位で小便をしたら、あとで大変だとは思ったが、好奇心に負けてしまった。

その後、どんな騒ぎになったかって？ 何のことはない。そこは僕のベッドの中だったからである。

もう一つの地球

人は老いるにつれ、記憶を失い赤子あかこに帰っていく。だが、言うことが頓珍漢とんちんかんな母も、人としての感情は持っている。震災のニュースを見ているうちに、表情が悲痛なものに変わっていった。

「このまま地球がなくなってしまうたらどうするの」と嘆き、「地球はいくつあるの？」と問うてきた。

「地球みたいな星はいくつもあるよ。いつか消えてしまってもね」

人間はいずれ生を終えるわけだが、生命が宇宙の中で存続するかどうかが、母にとっては、お茶菓子よりも重要なものにな

っていた。それが死を乗り越えるための切り札ふだだからだ。なだめようとしていると、母は真剣な顔つきになって、食ってかかってきた。

「人類が出来るまでに時間がかかるんだから！」

もう一人のお前

俺はもう一人のお前だ。お前が子供の頃も、結婚して女房と
いがみ合い、妻子を捨てて一人で生きる道選んだのだって知っ
てる。お前はいつも孤独をかこっていたが、俺はお前の体の中
でじつと身を締め、お前の体液すすりながら生きてきたんだ。
人として生まれることなく、自分が生きるはずだった人生を夢
見ながら、お前が命尽きる日まで付き合ってやろうって思った
のさ。

それなのに、お前は俺の存在に気づくなり、自身の腹をメス
で切らせて、俺を中から引き出しやがった。俺が呪いの言葉を
放って腕を伸ばしたのを、お前に見せてやりたかったよ。俺は

ホルマリン漬けにされて、医者の見世物にされるだろう。でも、
このままで済むってわけじゃないぜ……

与那国島の人升田

琉球の西端、与那国島の村で真夜中、銅鑼と法螺貝がけたましく鳴り渡った。杖を突かなければ歩けなかつた父親は人升田に入らず、息子の前で若い衆に棍棒で殴りつけられ血まみれになった。瀕死の父に息子がすがりつくと、父親は虫の息で遺言を残した。

「与那国は女王に治められた平和な島だった。そこに琉球王府が攻め入ってきた。今度は琉球に薩摩が侵攻してきたが、上前をはねる薩摩のために、王府はこの島に人頭税を課したのだ。弱い者がさらに弱い者を虐げて、被害者面しているのさ。人減らししなけりや年貢が払えぬ。これは島の掟だから、村の衆

を恨むでないぞ。しかし、こんな不正にあぐらかく王府は、いずれヤマトに攻め滅ぼされようぞ」

理想の相手と出会えます

結婚したくてもできない草食男子の皆さん、朗報ろうほうです。理想の相手と出会えます。さびしい夜ともおさらばです。しかもお金がかかりません。必要なのは姿見すがたみ一枚だけです。

まず、裸になって鏡に自分の像を写したら、女性のイメージに変容させていきます。スタイルや容貌ようぼうは、お好みのタイプにしましょう。胸の大きな、色っぽい女の子がいいですね。女性の下着を身につければ、イメージしやすいかもしれません。修行ぎょうけつを続けている間は、禁欲を保ってください。靈氣きよけつを凝結ぎょうけつさせられれば、理想の女性おんなが夢の中に訪れるようになります。ただし、子供は作れませんので悪あくしからず。

もし誤いって自分が女性化した場合は、ドレスを着て理想の男性おとこを射止いとめましょう。

冷泉帝の懊惱

六条院ろくじょういんの光源氏ひかるげんじのもとに、冷泉帝れいぜいていがお出ましになった。帝みかどは深刻な面持ちおももで、いきなり讓位じやうゐしたいと仰せになった。

「私は聞いてはならぬことを、夜居よゐの僧そうから聞いてしまったのです。私は桐壺きりつぼの帝みかどの皇子おうじではなく、六条院の子だといひます」

「それは事実じじつかもしれませんが。見たことがない母への思慕しぼが募つる余り、藤壺ふじつぼの中宮ちゆうぐうと許ゆるされぬ関係を結むすんでしまったのです。しかし、讓位じやうゐしたいなどは仰せにならないで下さい。たとえ臣籍しんせきに下くだった私の血ちを受けていたとしても、三種さんしゆの神器じんぎをもつて即位きゐされたからには、帝みかどとして君臨くんりんされているのです。帝みかどが凜

とした姿すがたで御簾みすの向むかこうにお立ちになれば、臣下しんげは謹つつしんで敬うやまい申し上げ、国くにの安寧あんねいは保たもたれるのです」

老子再誕

周の国に生まれた老子は、入滅にゆうめつした後も生死を繰り返し、衆生救済のために將軍が支配する独裁国に転生した。この国では人は棺桶かんおけから老いさらばえた姿で誕生し、知性は幼児のまま、若い姿の大人やあどけない顔した高齢者を支配していた。時の流れとともに賢さを増す住民は、肉体ばかりが若返っていた。赤子の姿で晩年を過ごすのだった。

老子は幼い頃の自分を思い起こさせる高齢者に共感し、生まれて間もない皺しわだらけの將軍が、虫を殺すように住民を虐げしいたているのに心を痛めた。そこで、將軍に拝謁はいえつして知性が増す仙薬せんやくを献じた。案の定じよう、

將軍は一気に飲み干してしまい、見る見る若返ってその日のうちに、母親の胎内たいたいに呑み込まれてしまった。

ロボットがあふれる

「世界中がロボットに占領されています」

テレビを見たロボットは、アナウンサーの発言に耳を疑った。いくらコンピュータ技術が発達しても、人間の頭脳を超すような機能を持つロボットの出現は疑問視されていたからだ。ニュースを見たロボット自身も、それはよく知っていた。

信じられないまま町に出ると、駅前はスマートフォンを片手に、夢遊病のように歩き回る若者であふれていた。彼らの目は小さな画面に釘付けで、中に現れた怪物を捕まえることに夢中になり、車と衝突したり、下水に転落したりしていた。人間としての判断力はすっかり失われていた。

「なるほど、これならゲームをしないロボットが、人間どもに君臨する社会も夢ではないな」

私は誰（我是誰）？

中国のある町で、老女が道に倒れていた。

青年が老女を助け起こしたが、足首をひねったのか、引きずるように歩いている。ところが、周囲に人が集まってきたのを見るなり、老女の態度は一変した。

「私はこの男に突き飛ばされたのに、知らぬ振りして行こうとしてるんですよ」

老女は青年のシャツをつかんで放そうとしない。男たちが走り寄ってきて、青年に詰め寄った。

「医療費払ってもらうからね」

「何言っている。倒れてたから助けようとしたまだけだろ」

男たちは嘘つけ、公安に引き渡せと騒いでいる。

「何を言う。僕は警官だ」

青年はポケットから警察手帳を取り出した。

「非番だったんだ。婆ばあさん、正直しょうじきに名前を言いなさい」

「私は誰だったかいの？」